2022年11月1日発行
（毎月1回1日発行）（77巻11号）
ISSN 0035-7774

Digest of Science of Labour

労働の科学

2022
November 11
Vol.77, No.11

表紙　黄金の国／山本美智代

特集

伝えること つながること 続けること

地域と共に歴史と文化を継承する博物館めざして／松本市立博物館分館 旧山辺学校校舎
地域に根差した文化拠点 節夫文庫／近藤 泉
活版印刷の技術と魅力を伝える／市谷の杜 本と活字館

巻頭言

労研との四半世紀
外山尚紀

連載

ILOインド・南アジアこぼればなし⑲
川上 剛

凡夫の安全衛生記㊾
福成雄三

漂流者たち―クミジョの肖像⑳
本田一成

連載

芸能従事者の今⑯
森崎めぐみ

労研アーカイブを読む㊶
椎名和仁

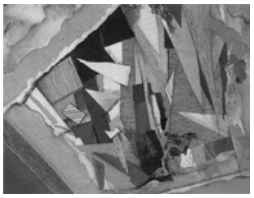
大原記念労働科学研究所

Digest of Science of Labour

労働の科学

2022 November 11
Vol.77, No.11

巻頭言　俯瞰（ふかん）
労研との四半世紀 1
外山 尚紀［大原記念労働科学研究所 協力研究員］



表紙作品：山本美智代
「黄金の国」
和紙と布のコラージュ＋ドローイング（45×33cm）
表紙デザイン：大西文子

特集　伝えること　つながること　続けること

地域と共に歴史と文化を継承する博物館目指して
..... 松本市立博物館分館 旧山辺学校校舎 5

地域に根差した文化拠点　節夫文庫
..... ［節夫文庫事務局］近藤 泉 10

活版印刷の技術と魅力を伝える
..... 市谷の杜 本と活字館 15

Series

ILOインド・南アジア こぼればなし (19)
パキスタン，パンジャブ州の労働監督官トレーニング ..... 川上 剛 20

芸能従事者の今 (16)
インターネット上の誹謗中傷とストレス ..... 森崎 めぐみ 23

Series

「＃教師のバトン」で伝わる (18)
教職員の過酷な勤務環境 ..... 藤川 伸治 28

漂流者たち クミジョの肖像 (20)
『クミジョ白書2019』(8) ..... 本田 一成 32

労研アーカイブを読む (81)
良い職場環境が看護師の能力を高める ..... 椎名 和仁 34

労研アーカイブを読む (82)
モラール調査からリーダーシップの分析へ ..... 岸田 孝弥 40

凡夫の安全衛生記 (69)
「安衛法とともに」適用除外申請も ..... 福成 雄三 44

Column

Talk to Talk
調和へ向け ..... 肝付 邦憲 46

KABUKI
籠釣瓶花街酔醒
歌舞伎で生きる人たち その十七——夢かなうとき ..... 湯淺 晶子 48

つれづれなるままに
映画に学ぶ〈3〉 ..... 千葉 百子 50

BOOKS
『太陽系観光旅行読本 おすすめスポット&知っておきたいサイエンス』
太陽系の歩き方 ..... 椎名 和仁 54

勞働科學のページ 56

次号予定・編集雑記 64

労研との四半世紀

外山 尚紀

とやま なおき
大原記念労働科学研究所 協力研究員
労働安全衛生コンサルタント
建築物石綿含有建材調査者協会 理事
東京労働安全衛生センター 理事

労働科学研究所（以後、労研）の協力研究員を拝命して、来年で25年になります。1998年、労研の研究員をされていた川上剛さんに同行してパキスタンでの参加型安全衛生トレーニング「POSITIVE」に参加する好機を得ました。これは、労働組合の主導により、作業負荷、環境保護等の改善領域を討議し、「前向き」に改善を積み重ねるもので、アジア10ヵ国で成果を挙げています。成功した要因は、具体的な改善を通じて労使の意識を変え、自律的な活動を継続する点が大きいですが、アジアの国々の近代化つまり、経済成長と労働組合の発展が後押ししていると思います。その後も、多くのアジアの国々を訪ねましたが、そこでの光景は、日本の高度経済成長期の早送りを見るようで、これら参加型アプローチには、近代化という「大きな物語」を共有している「熱気」がありました。

国内では、前世紀末に約2、000人だった労災死亡者は、2015年には、1、000人を切りました。しかし、労働による脳・心臓疾患と精神障害は深刻化し、2001年には労災認定基準が策定・改正されました。近年では、3、000件以上が労災申請していますが、認定されるのは三分の一以下にとどまっています。職域ストレスは、「○○ハラ」に細分化され、化学物質過敏症のように予防と救済がさらに困難なリスクも現れています。これらはポスト近代化的な状況の進行と見ることができます。個別化、複雑化し、解決が困難になっています。

近代化の文脈の中で奏功した参加型アプローチは、ポスト近代化の中で活かせるのか？　という課題は、小木和孝さんを中心とする労研チームの「職場ドッグ」、東京労働安全衛生センターの活動で実践されています。これらに共通しているのは、情報共有とコミュニケーションについてのサブテーマを設定している点です。アジアの国々での「熱気」は背景に下がり、一人ひとりの状況を理解し、共感することを導き、きめ細かな改善を進めることに軸足を置いています。解決への取り組みとして、期待されます。

一方、労働衛生上の最大の脅威となっているのが石綿です。この25年は石綿被害顕在化の年月でもあります。労災死亡者が1、000人を切るなかで、石綿による労災認定者はそれを上回っています。石綿自体は、きわめて古典的なリスク要因ですが、問題となるのは建築物に残された石綿建材です。つまり、製造・使用された近代化過程では予想されなかった（ときに無視された）リスクであるという点で、また、製造・使用段階よりも対策が困難になる点（その所在さえわからない）でも、ポスト近代化的リスクと見ることができます。

来年から建築物石綿含有建材調査者による調査が義務化されますが、調査には独特の難しさがあります。見落としが許容されにくく、多様な建築物に使用された多様な製品を対象としていることから知識と経験が必要です。今、建築物石綿含有建材調査者協会は、調査者の技術確保のための研修を提供しています。「こうすれば調査できる」ツールを開発し、水平展開すること、そして「正しい調査が被害を最小にできる」前向きな姿勢を重視し、石綿調査の「できる化」を広めています。これもポスト近代化的リスクへの参加型から学んだ試みといえます。

今年5月に亡くなられた天明佳臣さんの遺稿「出稼ぎと医療」が発刊されました。宿舎での健診や労働現場での観察と調査が、繊細で心のこもったものであったことを知り、胸が熱くなります。そして、参加型改善を模索しながら実現できなかったことが語られています。お手伝いできなかったことが残念です。

多くの人々の経験、情報、技術そして交流のプラットフォームである労研との貴重な出会いから四半世紀が経とうとしています。学ぶべきこと、行うべきことは、まだ多くあります。